

『嬉しかった!』

千葉県 渡会二郎 (61)

地震で破損した屋根に、青いビニールシートをかぶせようとしている老人が、風に煽られて、一人で難渋している。危なっかしくて、見ていられなくなった私は、道端の柿の木に犬をつなぐと、勝手に梯子を上っていく。「お手伝いします」と声をかける私に、老人は仏頂面をする。まったく……と、私は思う。

一カ月ほど前、愛犬が道路の真ん中で小便をしているとき、ヌツと垣根の上から顔がのぞき、「うちの前で小便をさせるなー」と怒鳴られた。それが、その老人だった。平身低頭しながらも、私は面白くなかった。

ところが、それからわずかして、犬の散歩中に東日本大震災の大きな揺れ、怯えてうずくまったまま歩こうとしない老犬。仕方なく抱いて帰宅しようとするが、何しろ三十キロを越す肥満体。往生しているところへ通りかかった軽トラが停まり、『荷台に乗せろ』と怒鳴り声――。

二人して何とか屋根の補修が終わり、余計なことをしたかといくらか後味の悪さを感じつつ、梯子を降りようとする私に、老人がやっぱり怒鳴った。

「今夜、ウチに呑みに来い!」 不觉にも、私は涙がこぼれた。